

手すりの二名家

玉造と紋十郎

天保十年、十一歳から舞臺に出て、明治三十八年二月十二日、七十七歳で歿するまで、六十年の生涯を人形舞臺に捧げ、終始文樂座の爲めに盡した、先づ年功から云つても、第一の殊勳者は吉田玉造であらう。父は吉田徳藏、一かどの人形遣ひ、蛙の子が蝦蟇となる。

玉造は荒事でも立役でも道化でも、人間でもない動物まで巧みに遣つて、その上、宙乗りから早替りまで、なんでも遣れるといふので、俳優の尾上多見藏のやうに『兼ル遣ひ』といふ名稱を世間から貰つた。

江戸猿若町の芝居で、石橋の獅子を使つて江戸つ子を驚かしたことがある。山野に分け入つて猛獸と同居して研究したと云ふが、これはちとデマ臭い。

松島文樂座初興行の時、松嶋八景の所作事で、七化けの早替りて魔術以上と見物を驚かした。

(明治五年一月)

その文樂座で、五天竺の孫悟空になつて寧ろ冒險的な宙乗りを行つた、その奇抜さが當つて、七十日間大人を續けた。(明治十三年五月)

文樂が御靈へ移つた明治十七年九月の初興行に、夜這星の所作で、二階棧敷三方の勾欄を、

まるで飛鳥のやうに宙づりて飛行した。その他、

お染久松の七化、玉藻前の狐、廿四孝の狐火、

伊賀越新關、千本櫻御殿、芦屋道滿、八犬傳、

狭間合戦、七福神寶船、四谷怪談、詠開秋七草、

小倉色紙、大江山など、頗る玉造の活躍に適し

た狂言である。

太夫の見臺から現はれたり、懐ろから出たり、

天井を縦横無盡に駆け廻はつたり、まるで輕業師のやうなことまでした。見物は知らず知らず好奇心に驅られて吸ひ寄せられた。

これ等宙乗りの工夫に與つて力のあつたのは、玉造に友人として、市川米十郎(後の小團次)



吉田玉造

や中村梅玉があつたからに違ひない。こんなケレンだけではない、一面本筋の研鑽には宙乗り以上、七化け以上の大飛躍大修行を積んだ。

かうした活躍と勤勉家に相應した丈夫な體軀を玉造に與へた神様は、玉造が死ぬる年の正月元旦に、病床にある彼に、七つの餅を與へて試めされた。ところが、その餅をケロリと平げた玉造が平氣な顔をしてゐたので、神様も追がに舌を捲いて驚かれた。

勤儉といふ奴が通り越して弩級になると、ちよつと評判が悪くなる、その程度の蓄財家だつた玉造は、所持金は寢ても醒めても、宙乗りでも早替りでも、滅多に鬱金木綿の財布に入れて離すことではなかつた。紙幣は破れ易くていけない銀貨がいゝ、銀行へ預けては破産をしられては危険、かう賢明なる考察力をもつてゐたので、あるだけの金はふところへ押し込んで置くといふ流儀。

玉造がかうして金を貯めるのは、伴の名人の卵の玉助は死んでしまひ、孫の富吉は盲目なり、なんとか後の爲めを謀つて置かねばならぬと、子を思ふ親心からであらう。(孫富吉は今の富崎大檢校)

人としての玉造は自信が強く男氣もあつたが傲岸な片意地もなかなか強く、世間學には幼稚

園の坊つちやんだつた。

この外に玉造と中村鴈治郎、その他の逸話は前項——清水町濱興行時代——にあるから、それについて讀んで貰ひたい。

藝人は若くなければ駄目だといふので、戸籍面改正の時、ほんとは天保十二年生れなのに四年八月十五日に死んだのは、實は七十歳なのである。玉造と同様親からの人形遣ひで、親は桐竹門十郎といつた立者である。

醬油屋、砂糖屋、下駄屋、乾物屋、摺墨屋、何處でも皿背りばかりした丁稚奉公時代、所詮は人形遣ひになりたいといふので、親もとうとう我を折つた。

十四五歳の時、祭文の能勢山席で、朝顔日記の大井川の場の、深雪の足を遣つたが、無能だとタツタ一度で足あがり。

文樂座へ入つてからは、父の死後父の名の桐竹龜松と名乗つてゐたが、或時先代萩の床下の鐵之助を遣つたところ、相變らず無能で頭取の二代目吉田玉治は、——とても物にならぬ——

ととうとう最後の宣告。

嚇つと憤慨はしたものの、事實は事實。龜松手も足も出ない、そこで懐中僅か十六文を命のたよりに、とぼとぼと江戸を志して大阪を見捨てたのだつた。



桐竹紋十郎

人に拾はれることになり、その父親の陸奥大塚、道化遣ひの辰松六三、などに就て今度は本氣に勉強をはじめた。その結果いよいよ女形専門の素志を固めたのである。その昔の辰松八郎兵衛、文化文政頃の二代目吉田辰五郎、嘉永の二代目吉田辰造、など女形専門の名人は至つて尠ない、その名人の數に數へられるまでに皿普り小僧は

出世をした。

紋十郎一代の至藝として許されるものは、政岡、板額、お辻、阿古屋、お三輪、お俊、玉手御前、おさん、帯屋のお絹、酒屋のお園、おつま、お千代、お谷、などだが、明治九年四月、

松嶋文樂座で、『一の谷』の相模を遣つたのが斯界に認められた出世藝。

師匠の西川伊三郎について淺草の芝居へ出てゐた頃の話。いよいよ大阪へ歸ることになつた。その時忠臣藏の九段目が出てゐたが、師匠の戸無瀬で、紋十郎は力彌の足を遣つてゐた、折角歸郷の土産に、何とかして人形の頭を遣つて見たい、どうぞお情けで一度でいいから頭を遣はせてください——と悲しい聲を出して頼んだ。

師匠は紋十郎の心を酌んでくれて、とにかく遣はしてくれたのが下女おりんの一人遣ひの人形である、これでは何もするところがない。紋十郎はがっかりしたが、それでも足よりはましである。兎に角一人前の體軀は備へてゐるおりんである、小言は云へない、そこで紋十郎考へた、せめて此役を一人前に遣へるやうに工夫をするより外はないと。そこでウンと頭をひねつたのだ。

やつと一風を案出して、そこで此場を語る織太夫に先づ賛同を求め、左手と足を遣つてくれる相棒を頼んで、いよいよ新工夫の實演といふことにまで漕ぎつけた。戸無瀬が小浪を連れて門口で案内を乞ふと、——昔の奏者今のりん、ドーレ——といふところ、紋十郎かねての新案、下女おりんは、赤い襷、髪を髻付けて突つ立てさせ、結みかけた髪といふ思ひ入れ、飛

んで出る、二人の顔を見て吃驚し、先づ襟をはづし、髪をキリキリと巻き上げて簪で止め、その手を前垂れて拭いて、それを帯にはさみ、両手をついて『どなた様』といふ段取り。命がけの新工夫はどうどう世間から認められた。

この新工夫が云ひ傳へられて、歌舞伎でも、可なりの俳優が此りんの役を御馳走役に買つて出る慣例が出来、紋十郎の型によつて勤められることになる、と其後上方へもその通りの型が傳へられる。人の一心ほど恐ろしいものはない。

明治三十四年の夏、東京明治座興行に、大切乗合船を語つた常盤津林中、紋十郎の萬才が、一回の下合せもなく、それで一分の隙もない絶妙の出来に、舌を巻いて仰天した。

紋十郎が此世の暇をつげる、その四十三年の四月興行、阿古屋の琴責で、特に注文をして三貫目もある重い人形を遣つた。その阿古屋がどうどう病氣に觸つたらしい、病臥中はたゞ芝居の囃語ばかり云つてゐた。

最期の前日の夕暮、二十四孝の八重垣姫を、病床で仰臥したなりで、手ぶり足どりで、細い嗚れ嗚れの聲でかけ聲をして、夢中で遣つてゐるやうな容子をしたりした、看護の人達は皆聲を吞んで泣かぬものはなかつたといふ。果してその翌曉四時、眠るが如く此世を去つた。行年

六十四歳。

玉造、紋十郎の他には先に吉田辰五郎、辰造のお山つかひの大立者あり、後には二代目玉造、三代目玉造、吉田多爲藏が、群を抜いて光つてゐた。これ等の人達は或はこれが最後の名人であるかも知れない。

語り手の代表的五名匠

攝津、彌、津、大隅、越路

明治時代を通じて咲き匂うた五名人を花に喩へて見ると、攝津は櫻、彌太夫は梅、津太夫は菊、大隅が桃、越路が紅葉と云ふところであらう。

攝津 大 掾

人なつこい愛嬌のある童顔、長い眉、濡れた眼、それに天稟の品位ある美音が百萬の強敵を